

# 清流

題字：芳野 充

令和3年11月30日  
第59号

発行所 加来不動産㈱  
発行者 加来 寛  
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに  
静かに  
清流のように

## 自分にも他人にも寛容でいよう

今月ご紹介させていただく「二十の徳目」は、十六番目の「寛容」です。「寛容」とは、心を広く持ち、許してやること、です。

この徳目は、わたしにとって避けてはおれない徳目です。と言うのもわたしの「寛」という名前は、聖書に出てくる「寛容」からつけた、と母から生前聞かされていたからです。学生時代は「ふくん」と軽くながっていました。縁あって会社を継ぎ、スタッフも家族も増えてくるころから自分の名前がキライになりました。理由はかんたんです。名前の意味とはほど遠いわたしに嫌気がさしたからです。

母が心不全で急逝し、急ぎよわたしが代表取締役就任したのが二十五歳のとき。その後、縁あって池田繁美先生が主宰する素心学塾に入塾し、いわゆる人間学というものを学ぶようになりました。そこで初めて自分が未熟な人間だと認識しましたが、未熟さを正そうにも今までの悪い習慣が染みついていたため、努力してもまったく手ごたえを感じず、自分自身にダメ出しばかりの日々。そして妻やスタッフの行動をみるにつけ手を抜き怠惰にみえて相手を責めたてたり、自分の価値観を押しつけたりしていました。いま思えばその頃のわたしは、「オレはこんなに努力しているのに、お前たちは何だ！」と八つ当たりに近い心境だったと思います。当然、人間関係は急激に悪化していったことは、言うまでもありません。

いまこの原稿を書かせていただきながら改めて「寛」という名前をながめると、以前のようなマイナスの感情が湧いてこないことに気づきました。それは、わたしが自身の未熟さ至らなさをきちんと受け止め、許せているからだと感じます。同時に以前に比べると相手に対して、「完璧な人はいない」「人はみな心にクセをもっているものだ」「みんな努力してくれている」と思っているわたしがいます。

実験から「寛容」とは、相手に対して心を広く持ち、許してやることです。ですが、同時に自身にも寛容であることが大切な気がします。ただ、それは単なるワガママや甘え、怠惰なこととは一線を画すべきでしょう。未熟であることを受け入れつつも、それを改善する努力や行動は必要なことです。時間はかかりますが、自分にも他人にも寛容でいられるわたしを目指したいと思います。最後に、「寛」と名付けてくれた両親に感謝です。

加来 寛

